

門口神具店

3年かかっつてなんとか一人前
今は少ない神具職人として
まだまだ技をみがかなあかん

店主・神具職人 門口嘉夫さん

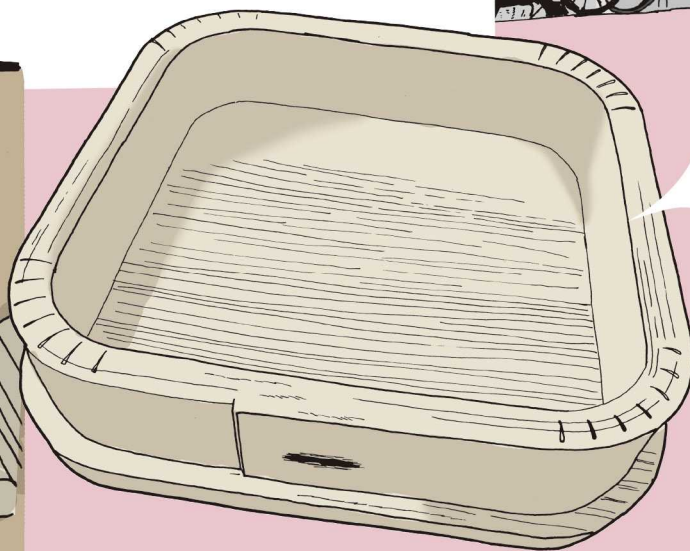


親父は3歳の時に、事故で片足のひざ下から切断してしまい、それでどこも使ってくれなかったんです。そんな中、岡山県にある神戸屋という神具店で「稚奉公」をすることに。10年以上、奉公して昭和のはじめに大阪で今の仕事を始めたんです。

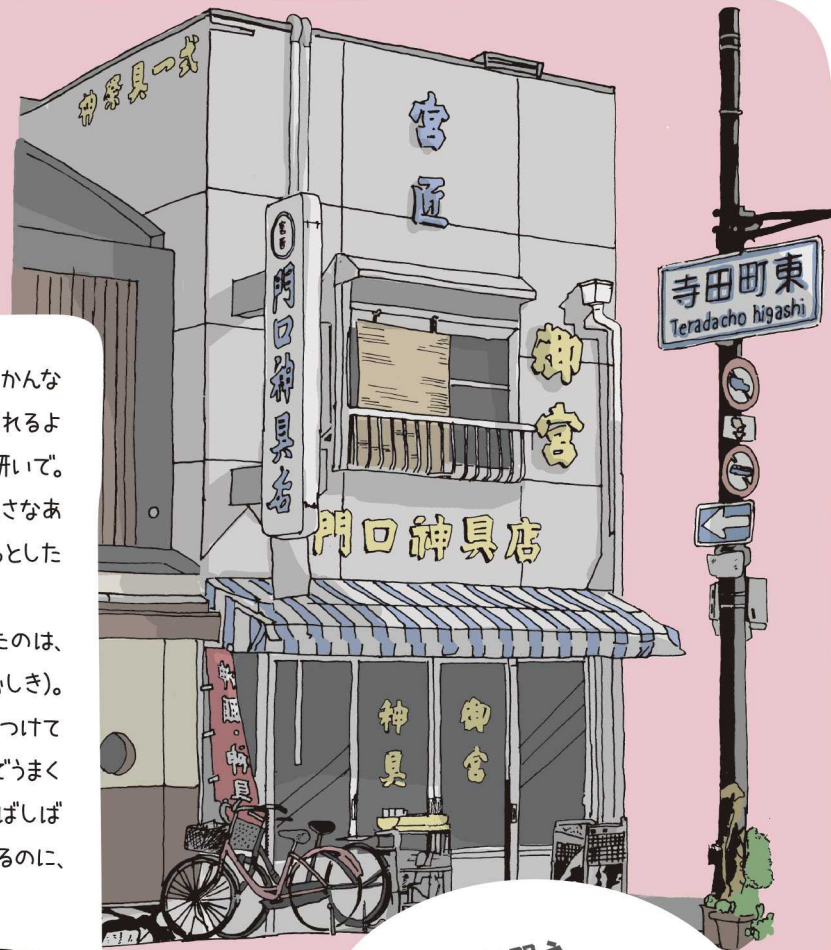
私は工業高校で「建築デザイン」を勉強。建築事務所もちかかったけど、家業をついだほうが人に使われていいかと思ったんで

すわ。最初は、道具であるかなん研ぎから。刃先をそろえ、切れるように研いで、使ったらまた研いで。粗く削るのは刃をようさん出さなあかん、刃を薄めにしたら、すっとしたクズが出るんです。

ようやく作らせてもらったのは、食器などをのせる折敷(おしぎ)。角の丸い部分はお湯に木をつけてまげていくんですが、ひずんでうまくできず、捨てられることもしばしばでした。木をけずるようになるのに、3年ぐらいかかりました。



まず最初に習う折敷(おしぎ)とは「へぎ」を折り曲げて縁にした角盆。食器などを乗せる。角に入れた切り込み(隅切り)の数で仕事の丁寧さがわかる。7つ入っているものは今では珍しい。

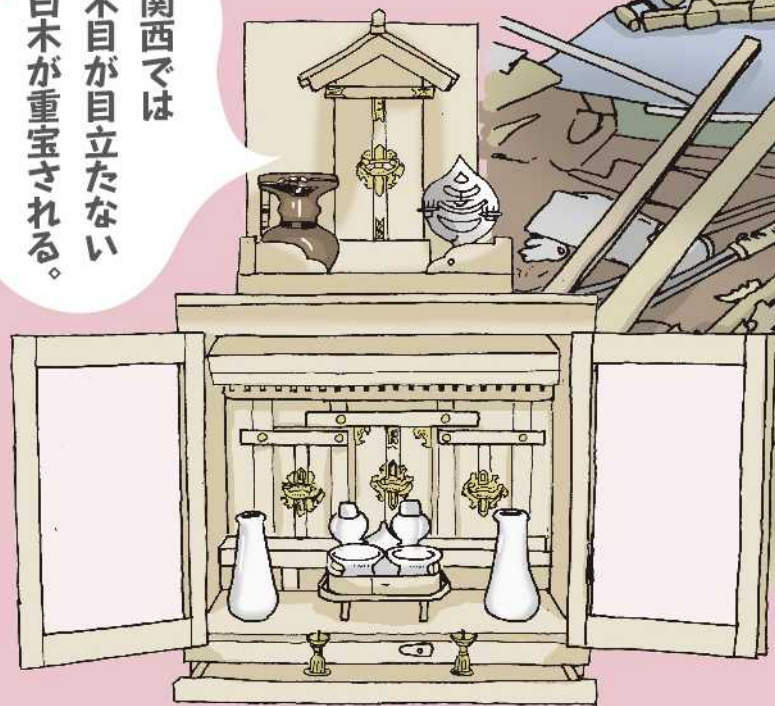


我が社の
自慢

テレビ番組で
何度も
紹介された!

タレントが街めぐりをするテレビ番組には、ほとんどと言っていいほど登場。店のすぐ奥に工房を構え、木くずに囲まれながら門口さんがカンナやノミを削って作り上げる姿が紹介された。

関西では
木目が目立たない
白木が重宝される。



長持灯は
神棚の両脇に
一対で飾る

今マンモ図面はかいてますけど、杖ではかりながら、板とおきあつて自分の感覚で仕上げていくんです



三社神明造り神具作

三社神明造り神具作

大阪に10人しかいない 神棚や神具の製作 60年以上も手で作り上げる 職人技

仏壇は仏教、神棚は神様を祀るところ。かつて日本では神道も多く、家の中や外に神棚を設けることも一般的だった。その神棚や神具を60年以上に渡り手作業で作っているのが門口神具店の門口さん。戦前、戦後は大阪にも100軒以上の神具店があったが、今では10人程度しかいないそうだ。

神棚には、一人の神様を祀る一社宮、3種類の御札を並べてお祀りできる三社宮など。屋根の形も権現造や神明造、流造、切り妻流れ造、大唐破風造など異なるので、神道の知識も必要。仕事の流れとしては、どこに神棚を設けるのか、どれぐらいの大きさが可能かを確認。それに合わせて土台から作り、柱を建て、そして最後に屋根を合わせる。家を建てる時と同じ過程だ。使用する道具は、粗けずり、仕上げなど用途や加工部位に応じてかんなを使い分け、のこぎりやのみも使って、木を削って整えていく。

門口さんは現在、81歳。これまでの仕事を振り返ってみても、100点満点だと言えるほど満足したものはないと言う。つまり、より美しいものを、より完璧なものを追及する本物の職人魂があるからこそ。門口さんの技を引き継ぐ人は見つからないが、からだが続く限り、手を使いながら神棚を作り続けると力強く語る。

門口神具店

〒544-0024 大阪市生野区生野西2-5-16
TEL・FAX 06-6731-2570

事業内容/神棚製作、神具製造・販売